

「居場所」を創る

— 精神医療と宗教との連携による
〈カフェデモンクえりも〉の活動を中心に—

浮ヶ谷 幸 代

【略歴・所属】

千葉大学大学院社会文化科学研究科博士課程修了（学術博士）
現在、相模女子大学人間社会学部 教授

【専門】

文化人類学、医療人類学

【主著】

『苦悩とケアの人類学——サファリングは創造性の源泉になりうるか？』
世界思想社（2015年）
『身体と境界の人類学』春風社（2010年）
『ケアと共同性の人類学——北海道浦河赤十字病院精神科から地域へ』
生活書院——（2009年）

はじめに

不登校やひきこもりという若者たちの行動が社会問題化する日本社会で、1990年代以降、家庭や学校以外に若者たちの「安心していられるところ」「自分らしくいられるところ」としての「居場所」づくりが浮上してきた。教育学や心理学の領域では不登校やひきこもりの問題をめぐる多くの議論が蓄積されてきたが、本稿では社会学者のレイ・オルデンバーグの「サードプレイス」と現象学的地理学者のエドワード・レルフの「場所性」を参照することで、「居場所」の意味やその特性を考察し「居場所」論を広い視座でより深めることができると考える。

日本社会では宗教を排他的に捉える医療現場が一般的であるが、北海道えりも町では医療・福祉の専門家と宗教者との連携のもと、ひきこもりや精神障がい当事者をはじめとして地域住民のための「居場所」づくりが

始まっている。2015年8月から始まった〈カフェデモンクえりも〉は、ひきこもりの若者のための「居場所」をいかに創出するかと問いながら、精神障がい当事者主体としての活動に取り組んでいる。

そこで本稿では、〈カフェデモンクえりも〉の活動を通して、ひきこもりの当事者がいかに社会への扉を開いていくのか、当事者の自己変容を促した要因とは何か、事例を通して明らかにしていく。また、そうした要因を生み出した場所は、「居場所」としての特性をどのように創っているのか、参加者への聴き取り調査を通して検討していく。最後に、地域ケアを創出していく際に宗教が社会資源になり得ることを示していく。

1. 「居場所」から「場所性」へ

「居場所」という言葉が日本社会で顕在化してきたのは、「居場所がない」「居場所を失った」という否定的な語用によってである。そもそも「居場所」は、若者や子ども世代に限らず、大人にとっての「居場所」（オナナの居場所、オトコの居場所、夫の居場所、妻の居場所、高齢者の居場所等）をも視野に入れたテーマであった（藤竹編 2000）。それが、1990年代以降、後述するように、子どもを取り巻く社会情勢により「居場所」は、学校に対するアンチテーゼとして「学校ではない場所」「学校に代わる場所」が模索されるようになる。そして、子どもを対象としたフリースクールのような草の根的な「居場所」づくりという実践的課題に収斂していくようになった（田中編著 2001；子どもの参画情報センター編 2004）。

社会教育学者の萩原建次郎によれば、「居場所」という言葉が教育学の分野で大きなテーマとなったのは、1980年代に登校拒否（不登校）という現象が顕在化し、社会問題化されたことに端を発しているという（萩原 2018）。1990年代になると「居場所」の問題は不登校の増加といじめによる自殺、少年犯罪が頻発していくことに重なっていく。その後「居場所」という言葉は、子どもを取り囲む社会問題を背景に、単なる物理的空間を指すだけでなく、「自分とはなにか」「何のために存在するのか」という存在理由を問う存在論的意味合いを帯びるようになったのである（萩原 2018）。

臨床心理学者の中藤信哉もまた、居場所と不登校とを結びつけて「居場所」について論じている。不登校によって学校に通えなくなった子どもへの支援として、フリースクールやフリースペースが設立されはじめ、それ

を「居場所」と呼んだことがはじまりだという¹⁾(中藤 2017)。臨床心理領域では、不登校を思春期特有の不適応行動の一つとして捉え、「アイデンティティの未確立な状態」としてカウンセリングの対象として位置づけた。フリースクールが子どもの「居場所」となるには、学校や家庭とは異なる価値基準を有していなければならない。中藤は、フリースクールが「居場所」の原型となり、そこは子どもにとって「安心していられるところ」「自分らしくいられるところ」という意味が付与され、次第にその意味が中軸となって「居場所」という言葉が社会に定着していったと指摘する(中藤 2017)。

不登校問題を抱える教育政策の文脈では、1990年代文部科学省によって学校を「居場所」にするという方針が打ち出される。そのために制度化されたのがスクールカウンセラー制度であり、その後社会教育学や臨床心理学の領域で「居場所」研究が活発化していく。

都市社会学者のレイ・オルデンバーグは、産業化と効率化、合理化の進むアメリカ社会では人間が生きていくうえで核となる「サードプレイス(第三の場所)」²⁾が失われつつあるとする。「サードプレイス」を、第一の場所(家庭)や第二の場所(職場、学校)ではなく、人を家庭や職場(学校)での役割から解放し「自分らしくいられるところ」「くつろぐことができる場所」として位置づけたのである。「インフォーマルな公共生活の中核的環境」(オルデンバーグ 2013: 59)とされる「サードプレイス」は、馴染みの者や見知らぬ者同士による情報交換やコミュニティ活動の拠点となるという。「サードプレイス」の機能からすれば、文科省の「学校を居場所にする」という提案では、学校がそもそも居場所になり得るのか、そして生徒を役割から解放することができるのか、と問う視点が抜け落ちてしまっているのである。

「居場所がない」という若者の言説から「居場所」の意味を読み解いた先の萩原は、本稿で目指す「場所性」の議論との接続を可能にする。萩原は、存在論的アプローチから「居場所」を「観念的な場所であったり、客観的な物理的空間としてではなく、具体的な他者・自然・事物との関係において生起する関係態」(萩原 2018: 126)であると位置づける。そこで重要なのは「居場所」は単なる物理的空間ではなく、参加する人たちが織り成す関係の網の目としての「関係態」であるという点である。さらに強調するのは、大人の側の「あるべき人間像」や「期待すべき青年像」という

一方的なまなざしのもとでは、若者自身が抱える「わからなさ」（不確実性）や存在の「かけがえのなさ」（代替不可能性）をそのまま受け入れることができず、そこでの存在充溢と自己形成の機会は失われてしまうと指摘する。

失われつつある存在充溢や生きられた世界を回復するために「場所性」の議論を展開したのは、現象学的地理学者のエドワード・レルフである。レルフは、現代の消費や嗜好の対象が標準化されている大量生産社会において、人びとの生き方自体が均質化し、場所の多様性が衰えていくプロセスを「没場所性」と呼んでいる。

レルフは、「場所性」を回復するために「場所」の本質について「実質的には、すべての人々にとって、自分たちが生まれ育った場所やいま住んでいる場所、あるいは自分たちが特別な感動的体験をした場所との、深い結びつきとそれについての意識がある。この結びつきは、個人的および文化的な一体感と安心感の生き生きとした源泉、つまりそこから私たちが世界の中で自らの方向を見定めていく出発点を構成しているように思われる」（レルフ 2004：114-5）と述べている。レルフによれば、「場所」はすべての人にとって感情的体験と深く結びつき、しかも一体感と安心感を生み出す源泉となる。そうであるなら、「場所」は人々にとって未来を志向する基点にもなりうるのだ。レルフは「場所」を以下のように定義する。

場所は抽象的な物や概念ではなく、生きられる世界の直接に経験された現象であり、それゆえ意味やリアルな物体や進行しつつある活動で満たされている。それらは個人的なまたは社会的に共有されたアイデンティティの重要な源泉であり、多くの場合、人びとが深く感情的かつ心理的に結びついている人間存在の根源である。（レルフ 2004：294）

レルフによれば、「場所」とは生きられる世界の直接的経験であり、意味やモノや参加者によるさまざまな活動で満たされ、未来をも志向する「関係態」なのである。社会的に共有されたアイデンティティの根源であるとともに人間存在の根源でもある。

本稿では、事例を通して、ひきこもりや精神障がい当事者にとって〈カフェデモンクえりも〉という場が、オルデンバーグのいう「サードブ

レイス」や荻原のいう「関係態」になり得ているのか、またレルフのいう「アイデンティティや人間存在の源泉」「一体感や安心感の源泉」になり得ているのか。さらに、自己のイメージが将来の自己像へとつながる契機となり得ているのかを検討していくことにする。

2. 精神医療と宗教との連携

ここでは、前半で精神医療と宗教との連携という、日本では稀有な関係を編み出した浦河ひがし町診療所（以後、診療所）の理念について、簡単に述べておきたい。そして、後半で日本ではなぜ医療と宗教との連携が難しいとされてきたのか、その背景を読み解いておく。

診療所は、浦河赤十字病院（以後、浦河日赤）精神科の病棟休止に伴い、2014年5月に元精神神経科部長の川村敏明精神科医（以後、川村医師）が院長となり、浦河日赤の元スタッフとともに設立されている³⁾。開設当初から診療所は、精神障がい当事者が地域で暮らすことを支える地域密着型の精神医療の在り方を模索してきた。これは、浦河日赤の時代から継続されている取り組みであり、40年以上にわたって精神障がいの当事者コミュニティである社会福祉法人〈浦河べてるの家〉（以下、〈べてるの家〉）⁴⁾と両輪となって担ってきた（浮ヶ谷 2009；2015b）。簡単に言えば、精神障がいを精神医療や病院治療の枠ではなく、当事者主体の生き方として捉えなおすという理念が基盤となっている。

開設以来、診療所はスタッフの新たな挑戦として、当事者の暮らしの場からまなざす地域医療を展開していくために、「脱施設化」を目指すことを掲げている。浦河日赤時代、病棟看護師は「管理」と「監視」を職務として身に付け、目の前の当事者を「治療・看護」の対象として捉えるまなざしを内面化していた。このことを専門家の「施設化」と呼んでいる。たとえ、当事者が地域で暮らすという「脱施設化」が可能になったとしても、暮らしの場にこうしたまなざしを持ち込む限り、当事者主体の生き方を支援する専門家にはなり得ない。そこで、診療所では専門家こそが「（病院医療の）脱まなざし」「脱施設化」を目指すべきであるという理念を共有するようになったのである（高田 2018）。

他方、2000年代に入り、厚生労働省は高齢者医療費の増大を見越し、高齢者ケアを病院医療から在宅医療へ移行する地域包括ケアシステムを提示した（高橋編 2012）。このシステムの理念として自助、互助、共助、公助

を基盤とした地域医療像が描かれており、なかでも地域住民やボランティアによる助け合いを意味する互助が包含され、地域密着型のケアが概念化されている。しかし、実態は医療制度や福祉行政の枠の中にあり、基本的には医療・福祉の専門家の連携によるチーム医療が中心となっている。しかも、そのチーム医療には宗教者との連携や地域を形作る文化や歴史への配慮はほとんど想定されていないのが実情であろう⁵⁾。

では、なぜ日本では医療と宗教との連携が想定されていないのだろうか。一つは、日本の政教分離の原則に基づいた医療行政の立場である。医療行政は宗教活動から切り離すという考え方があり、それが常識となっているからである⁶⁾。ところが、東日本大震災後、宗教、宗派を超えた宗教者の活動から始まった〈カフェデモンク〉は、傾聴活動を中心とした「心のケア」を標榜し、近年全国各地（12ヶ所）の寺院や病院、クリニックで開催されるようになった（東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座2017）。各地域からの報告によれば、研修を受けた臨床宗教師が中心となり、宗教者は参加者に対して傾聴という態度に徹している（実践宗教学寄附講座運営委員会）。今後、被災地だけでなく、看取りの現場で「心のケア」を担う役割が、臨床宗教師に期待されているのである。

二つ目は、科学的な医学の世界に非科学的な宗教は馴染まないとする医療・福祉業界の常識と、病院や医療の現場に宗教者（一般的には「お坊さん」）がいること自体「縁起が悪い」という社会の常識がある。ところが、〈カフェデモンク〉の目的は布教活動にあるのではなく、宗教者が宗教や宗派を超えて人びとの苦悩に寄り添うことにある（実践宗教学寄附講座運営委員会）。これまで日本では、一部の宗教系ホスピスの活動や近年始まった臨床宗教師の活動を除いて、宗教と医療は互いに排除するか棲み分けるカタチで存在し、両者が連携するという実践は一般的にはなかった。

そこで、精神医療と宗教との連携に着目する本研究は、近年の日本では想定されていなかった宗教施設や宗教者を地域ケアを担う社会資源とみなし、多職種連携チームの成員として位置づける試みでもある。本稿では、地域の精神医療と宗教との連携のあり方を探求し、医療・福祉という枠組みを超えて地域ケアを創るとはどのようなことなのか、地域密着型の精神医療と地元の宗教者との連携から生まれた〈カフェデモンクえりも〉の実践から考えてみたい。

3. 〈カフェデモンクえりも〉の活動

3.1 開催の経緯

浦河日赤の精神科病棟調査以来（浮ヶ谷 2009）、浦河調査のたびに、筆者はえりも町では月一回の巡回診療だけでは十分ではなく、精神保健福祉のサービスが行き届いていないことをスタッフから聞いていた。えりも町では精神科の医療機関がないことや専門家スタッフが不在のため、精神障がいを抱えている当事者や長期間ひきこもっている若者たちを掘り起こすには人的資源が不十分だったのである。

そこで、筆者は「地域のお坊さんの力を借りませんか？」とスタッフに提案をした。東日本大震災後、仮設住宅の住民の傾聴活動を行っていた〈カフェデモンク〉の活動を断続的に調査してきた筆者は（浮ヶ谷 2015a）、主催者の金田諦應住職にえりも町の課題について相談した。すると、偶然にもえりも町に知り合いの住職がいることがわかり、その場で曹洞宗法光寺の佐野俊也住職（以後、佐野住職）を紹介してもらうことになった。その後、診療所と佐野住職の間で迅速に話がまとまり、2015年8月26日に第1回〈カフェデモンクえりも〉を開催するに至ったのである（浮ヶ谷 2017b）。

3.2 活動の概要

〈カフェデモンクえりも〉は、人口5,000人弱（2017年6月現在）の町で常に20人以上の集客を確保している。活動は、毎月第4水曜日に午後2時から4時まで、えりも町交流会館「ひなた」の2階、フリースペースで行われている。参加者は、宗教者（仏教系、キリスト教系）、役場の保健師（障がい福祉課、高齢者福祉課）、医療・福祉の専門家（医師、看護師、ソーシャルワーカー）、ひきこもりと精神障がいの当事者（〈べてるの家〉と診療所のピアサポーター、えりも町の当事者とその家族）、ボランティア（えりも町の更生保護女性会、診療所の親の会）、地域住民、地域おこし協力隊、ジャーナリストなど、さまざまな立場の人たちである。年齢層も10代から70代まで多岐にわたっている。

〈カフェデモンクえりも〉の場は、飛び入り参加が自由、出入りも自由という場である。看板と飲み物、茶菓子等は主に佐野住職が持ち込み、それをボランティア女性たちが準備する。早めに着いた参加者は、5か所にテーブルと椅子を不規則に配置する。食べ物はふだん茶菓子だが、クリス

マスなどのイベント時には診療所や地元の人からの差し入れがあり、ときどき手作りピザやホットサンドなどの差し入れがある。

司会進行役を務めるのは、診療所の当事者柳さんである。柳さんは、当初〈カフェデモンクえりも〉のある日は体調が悪いことを理由に参加をためらうことが多かったが、半年を過ぎる頃から司会進行という役割への自覚が芽生えてきた。今では〈カフェデモンクえりも〉主催の勉強会やシンポジウムに積極的に参加するようになった。

2時頃になると三々五々参加者がやってくる。席は基本的には自由であるが、顔見知りの人たちは再会を喜びながらいつもの席に着く人もいる。柳さんが「〈カフェデモンク〉を始めます」とあいさつをする。初めての参加者がいれば、馴染みの参加者が声をかけたりしながら、ごく自然なかたちで席が埋まっていく。1時間ばかり談笑した後、楽器演奏や一芸を披露したりするときもあるが、相変わらず談笑を続けている人たちもいる。人によっては意図的にもしくはなんとなくテーブルを移動したり、ほとんど言葉を交わさないままというように、過ごし方はさまざまである。終了時の4時になると、「これで〈カフェデモンク〉を終わります」という柳さんのあいさつでカフェは終了する。

3.3 当事者主体の活動

〈カフェデモンクえりも〉の場合、他の〈カフェデモンク〉と比べて顕著に異なる点は、障がいをもつ当事者が中心となって活動していることである。当事者主体の背景には、40年前から浦河町では精神障がいの当事者が「病気とともに地域で暮らす」ことを実践してきた歴史と実績がある。その担い手が〈べてるの家〉である。〈べてるの家〉はスタッフとメンバーを合わせて200名以上で構成され、そこではピアスタッフやピアサポーター、ピアメンバーなど、ピアという精神障がいの当事者の役割が重要な意味をもっている（浮ヶ谷 2015b）。

〈べてるの家〉のスタッフとピアメンバーは、〈カフェデモンクえりも〉に初回から現在に至るまで常に参加し、当事者が主体となる活動を後方から支援している。〈べてるの家〉のメンバーの参加は、えりも町の当事者にとって障がいや生きづらさを抱えていても社会的存在として承認されている証となり、将来、社会で活動する可能性を予知させる存在となっている。

しかし、医療・福祉の専門家の参加によって、〈カフェデモンクえりも〉

の活動が「施設化」される可能性も否めない。当事者主体の活動を背景に、現在〈カフェデモンクえりも〉では多様な立場の参加者や自由度の高い活動を維持しているものの、当事者主体という理念がどこまで維持されるのか、専門家の参加の仕方によっては〈カフェデモンクえりも〉に行政の論理や医療・福祉のまなざしが持ち込まれる危うさは常にある。したがって、専門家は「脱施設化」を目指すことが重要な任務となり、自分の立ち位置が問われ続けることになる。

4. 扉を開けはじめた人たち——当事者の変化

〈カフェデモンクえりも〉の目的は、地域に埋もれている精神障がいの当事者やひきこもりの人たちが、〈カフェデモンクえりも〉に参加することによって社会とつながり、自分の世界を広げていく場所を提供することである。当事者たちが、自己像や他者との関係性、抱えている課題をどのように変化させていくのか、その変化のプロセスに着目してみた。実際、当事者の中には顕著な変化が現れてきた人もいる。そこで、ここでは3人の若者を紹介し、当事者の自己変容のプロセスを紹介したい。

4.1 ゆっくりゆっくりと自分を開く——Nさんのこと

Nさんはえりも町在住の30代の女性である。数年前に父親が無くなり、兄が浦河日赤精神科(当時)に「妹が10年間しゃべらない」と相談に来た。漁師だった父親が生前、娘を家から出さないようにとிட்டのがひきこもりの始まりだった。えりも高校卒業後、独り言をいったり、突然笑ったり、ときに興奮したりと、統合失調症を発症してிட்டようだ。月に一回、川村医師がえりも町の巡回診療で薬物療法を行うが、役場の外来待合室で待つのも難しい状態にあり、車の中で待つという状況が続いていた。川村医師もNさんの声を一度も聴いたことがなかった。服薬により症状は軽減したが、ひきこもりの状態と緘黙状態は続いたままであった。

〈カフェデモンクえりも〉が開催されることになり、看護師の広瀬さんがNさん親子(母子)を誘うと、Nさん親子は参加を承諾し、それ以来ほぼ全回参加している。Nさん親子の自宅は会場に徒歩で通える距離ではないため、毎回広瀬さんが送迎をしている。当初、広瀬さんが会場に入ると二人を端のテーブルに誘導する。Nさんに「なに飲む?」と聞くと、Nさんは小さい声で「カルピス」と答えたのが第一声だった。回を重ねると

に、自分から「コーヒー」と言うようになり、今ではコーヒーやジュースのお代わりを自分からするようになった。広瀬さんは他の参加者にNさんのことを知ってもらうために自己紹介を促しながら、Nさんの背中を少しずつ押してきた。

Nさんの母親が「親の私でさえ、何を考えているのかわからない」というように、発症してからは家族とも対話がない状況だった。月命日で訪れるK住職は、〈カフェデモンクえりも〉に行っても続かないだろうと思っていたが、それが続いているので驚いているという。後に、母親自身も「〈カフェデモンクえりも〉に) 何回か通うようになって、(娘の) 何かが変わったような気がする」と感想を述べていた。

あるとき、会場変更の連絡をしようと広瀬さんがNさんに電話をかけたが連絡が取れなかった。母親は耳が遠いので電話には出られない。すると、折り返しNさんから電話があった。だが、受話器の向こうは沈黙のままである。そこで広瀬さんは変更事項を一方向的に伝えた。Nさんが電話をかけ直したという行為は、相手とコンタクトしようとする意思の表れであると、広瀬さんはそのとき確信したという。その後、〈カフェデモンクえりも〉がある日は、支度を調べて(おしゃれして) 送迎を待つようになった。

Nさんは〈カフェデモンクえりも〉にコンスタントに参加することにより、ゆっくりゆっくりだが、母親や広瀬さんの力を借りながら、さまざまな人のいる場に馴染んでいった。Nさんと同じ世代の当事者のTさんは「Nちゃんがおしゃれしてここにきているのを見ると自分のことのように嬉しい」といい、柳さんは「Nちゃんは最近表情が豊かになってきた」と述べている。

2年たった頃、診療所のスタッフがNさんをデイケアのプログラム「アロマ教室」に誘ってみた(毎週、浦河町からえりも町まで広瀬さんが迎えに行く)。最初の1ヶ月は母親同伴で参加していたが、そのうち一人で参加するようになった。担当看護師によれば、「アロマ教室」では同世代の女性メンバーと並び、そのメンバーがNさんのことを手伝ってくれているという。Nさんに何か聞くと、声は小さいけれど「はい」と返事をするようになった。3回目くらいから自分から輪の中に入っていきようになり、「アロマ教室」の参加者(10人前後)のなかでNさんは格別目立つわけでもなく、今では輪の中にいることが自然な状態になっている。何かしてもらおうと御礼の辞儀をしたり、自分の好きなものを自分から探る感じも出て

きているという。

広瀬さんによれば、Nさんが一人でデイケアのプログラムに参加するようになり、それに対して母親は「すごく嬉しい、もう何も心配していない」と言っているという。Nさんは言葉で返すような質問をすれば、言葉で返すようになり、デイケアの朝ミーティングでも「体調、気分は普通です」といえるようになった。昼食の準備や片付けでも、自分から手伝うようになった。〈べてるの家〉の共同住居を訪問するプログラムにも参加し、住人と一緒にジェンガゲームをやり、住人から「じょうずだねえ」といわれるようになった。

Nさんだけでなく母親自身も変わっていった。最近、音楽が聴きたくなくて息子にCDとデッキを買ってもらったという。Nさんがデイケアに行っているあいだ一人で音楽を楽しんでいる。娘が変わっていく姿を見て、今は幸せだと思っている。〈カフェデモンク〉に参加する前は、娘と二人で対話のない日々を過ごしながら、自分の亡き後の娘の将来が心配の種だった。自分のために、音楽を聴こうと思う余裕はなかった。今のような生活をもたらしてくれた診療所のスタッフに母親は深く感謝している。

Nさんが〈カフェデモンクえりも〉に参加するようになり、10年間閉じていた自分の世界の扉を少しずつ開いていったエピソードである。開いていった要因はいくつか考えられる。なかでも、「そこにいていい」という場の肯定感、「問題を抱えているのは私だけではない」という仲間意識、「信じられる人の存在（広瀬さんや他のスタッフ）」という3点について考えてみたい。

一つ目の「場の肯定感」を生み出す源は、「場のわからなさ」である。「場のわからなさ」とは、特定の人を対象にしていないことから、だれでもが参加できること（出入り自由）である。また、明確な目的があるわけではないこと（参加者全員が同じことをやる必要もない、何かを指示されるわけでもない）から、治療や教育の場ではないことである。参加者の役割を問うこともなく、「ただそこにいていい」という一人一人の全体的な存在が保証されている場所である。

二つ目の「仲間意識」というのは、長年ひきこもっていた当事者は「苦悩を抱えているのは私だけ」という思いがあったが、参加者の自己紹介を通して「悩んでいるのは私だけではない」「困っているのはうちだけでは

ない」ということを実感することができた。初回の自己紹介では参加者全員が「自分の苦勞」を語ることになったが、なかでも障害のある息子の将来を心配しているK住職や、父親が認知症であり家族が困っているT住職は、それぞれ自分が抱えている悩みを吐露していた。それを聞いたNさんの母親は「お坊さんたちも困っていたんだ」と驚いていた。

加えて、〈カフェデモンクえりも〉には、先に述べたように精神障がい
の当事者やピアサポーター、ピアスタッフが常に参加していることである。病気や障がいをもつことがスティグマとされる世間に対して、〈カフェデモンクえりも〉では「それでいい」という安心感が生まれている。この場所は自助グループのような機能も併せ持つが、かといって当事者性
が目立つわけでもない。参加者のだれでもが何らかの理由で「苦悩している」という事実は、「苦悩しているのは私だけ」と思い込み、絶望している人を孤立から救い出す力がある。

三つ目の「信頼できる人」の存在である。浦河町からえりも町まで車で片道1時間近くかかるが、診療所による送迎は当初「持ち出し」であった。訪問看護というカタチをとれば報酬に結びつくが、それをしなかった。なぜなら、制度にのったカタチの支援では、交通費は患者負担になるからである。訪問看護であろうとなかろうと、スタッフたちは当事者が回復への道を辿れるようになるならば、支援することを惜しまない。広瀬さんのいつもと変わらない態度やルーティンとなった送迎は、Nさんが扉を開ける大きな支えとなっている。

4.2 世界の見え方が変わる——TさんとHさんのこと

4.2.1 Tさん

TさんはNさんと同世代の女性である。診療所の看護師の塚田さんと24時間、365日、メールのやり取りをしている。塚田さんのメール支援について川村医師は「頓服メール」と呼んでいる。精神医療での「頓服薬」とは、病気の症状が苦しいときにその都度服用する薬のことである。一時的に症状が悪化すると「頓服薬」を処方するが、川村医師は薬より効果のある方法として、いつでも他人とつながれるメールをそう呼んだのである。

Tさんは家業を手伝いながら、長期にわたって家族以外でのコミュニケーションをとることなく病気と付き合ってきた。自分の考えや心の中が他人にさとられるという被害妄想の中で現実逃避の言動が目立っていた。

〈カフェデモンクえりも〉にもときどき参加したが、家業の仕事やその日の気分によって参加はまちまちであり、人の集まる場所には長くはいられなかった。

大勢の人の中に長時間居続けることが難しいTさんにとって、メールでつながることや短時間で頻回に顔を合わせるといふ塚田さんとのコミュニケーションは、妄想の中で生きてきたTさんを現実に戻す力となった。最近では1週間に1回メールがある程度であり、電話で話す内容も現実の話に変わってきた。3月にえりも町であった映画の上映会とシンポジウム（〈カフェデモンクえりも〉主催）に参加し、100人以上参加者のいる会場で最後までいることができた。終了後、塚田さんに「今の自分ではだめだと思った。将来、仕事をしたい」と語ったという。

Tさんにとって〈カフェデモンクえりも〉に参加し、塚田さんとコミュニケーションをとり続けることで、かつて閉じこもっていた妄想の世界とは異なる現実世界に目を向けるようになり、自分の将来について考え始めるようになった。

4.2.2 Hさん

Hさんは20代の男性である。浦河日赤の精神科時代、診療所のソーシャルワーカーが母親から「中学生の息子がいるが不登校だ」と相談を受ける。Hさんの不登校は、中学の頃ヘアスタイルのことで何か言われたのがきっかけらしい。高校入学しても3日間でやめてひきこもりの状態になる。家では家業のコンブ漁の手伝いをやっていた。当時、定期的に病院で面接してきたが、いつの間にか途絶える。その後、ソーシャルワーカーはHさんの自宅に訪問したり、日常の話題を通してメールのやり取りをしていた。しかし、これも途中で途絶える。突然2013年ころ、Hさんから「覚えていますか？」というメールをもらう。そこで、Hさんと同じゲーム好きのソーシャルワーカー泉さんがゲームをしに自宅まで訪問するようになった。

診療所のスタッフたちは、Hさんの場合、〈カフェデモンクえりも〉への参加は時間がかかると思っていたが、とりあえず誘ってみた。意外にも初めての誘いで参加するようになり、以後ほぼ継続して参加している。〈カフェデモンクえりも〉についての感想は「楽しかった。いろんな人がいるんですね」とのことである。初めの頃は、ゲーム仲間の泉さんがいないと所在なさそうにしていたが、今では送迎が別の人でも拒むことはな

い。最近、えりも町にできたコンビニでバイトするようになり、柳さんに「絵を描きたい」と言っている。

Hさんの場合、ゲーム仲間としての泉さんの存在は大きい。最初に接したソーシャルワーカーはメールのやりとりや自宅訪問を行ったが、Hさんとの趣味の接点を見つけるのは難しかった。Hさんのことが気になりつつも、それ以上距離を縮めることはできなかった。それに対して、ソーシャルワーカーという役割から離れて、ゲーム好きという性格でHさんと付き合う泉さんは、プライベートに近い関係でコミュニケーションをとっていった。そうしたコミュニケーションの取り方が、Hさんにとって〈カフェデモンクえりも〉に参加するきっかけになった。

不登校やひきこもりの人にとって、大勢の人の中で自分をどう保つか、浅い付き合いの場でどう過ごすか、という課題に向き合うには、当事者とスタッフとの関係だけでは限界がある。後述するように、〈カフェデモンクえりも〉という場は、立場の異なるさまざまな人と人との関係の網の目によって創出されている。「いろいろな人がいるんですね」というように、HさんやTさんにとって「関係態」としての〈カフェデモンクえりも〉は、世界の見え方が変わるきっかけを作ったのかもしれない。自分だけのモノトーンの世界ではなく、「いろいろな人」のいる多彩な世界として見えたのではないだろうか。

初めてTさんに会ったとき、自己紹介した筆者に興味を示し「また、必ず来てくださいね」と声をかけてくれた。中座することも多かったTさんだが、筆者とのコミュニケーションは普通にとれていた。コンビニでバイトしているHさんもまた人との交流がそれほど苦手とは思えない。えりも町の場合、「ひきこもり」という従来の概念それ自体を再考する必要があるかもしれない。不登校になっても出かける場所がない若者にとって、家に引きこもらざるを得ない社会環境であることも起因していると思われる（浮ヶ谷 2018）。

5. 場を創出する人たち

Nさん、Tさん、Hさんのように、えりも町の当事者たちの自己変容の契機となった〈カフェデモンクえりも〉という場所は、いったいどのような場なのだろうか。当事者とスタッフとの1対1関係について吟味するだ

けでは、「場所性」について読み解いたことにはならない。そこで、ここでは当事者以外の参加者である宗教者と浦河町の当事者やスタッフの意見を紹介し、他の参加者たちがこの場所をどのように捉えているのか、そこから見えてくる〈カフェデモンクえりも〉の「場所性」の一端を読み解いてみたい。

5.1 「とまどいながらできることをする」——宗教者

〈カフェデモンクえりも〉の共催者である宗教者たちは、この場をどのように捉えているのだろうか。えりも町の宗教施設は管理者不在の神社も含めて8か所ある。〈カフェデモンクえりも〉を開催するにあたり、佐野住職は宗教者全員に声をかけたが、それに応じたのは曹洞宗のK住職と浄土真宗東本願寺派のT住職、プロテスタント系キリスト教会のS牧師の3人である。

T住職の場合、2015年に佐野さんから声がかかり、〈カフェデモンクえりも〉の話を聴いた。そのときのことを以下のように述べている。

何ができるかわからないけど、一緒に協力しようということになった。そのとき、佐野さんから、うつやひきこもりの人が40人くらいいると聞いて、「えっ！そんなにいるの？」と思った。坊さんが集まっていったい何ができるんだろう、と。生死をテーマにはいるけど、佐野さんからは「雑談から少しずつ心を開いてくれる場になったらいい」と言われた。僕らも勉強していくつもりで参加している。スタッフとは話をしたりするが、直接当事者と話をしたりすることはない。一言、二言交わすことはあるが、深い話はしない。何を話していいのか、難しい。何をしたいのかかわからない。でも、それでいいんだったら参加するという事になった。

T住職は「何を話していいのか、難しい。何をしたいのかかわからない」というのである。K住職も「佐野さんから『こんなことをやりたい。体の空いたとき、手伝ってもらえると助かる』と言われた。そのときは漠然としていたけど、『日程も合わないときがあるけど、堅苦しいことではないよ。参加できるときに来てくれればいい』と言われた。だから何ができるかわからないけど、これるときに来ている」という。

佐野住職もまた、当初、参加者の心の扉を開かせようと椅子座禅や写経を試みたが「何か違う」と違和感を覚えたという。後に、そのことを振り返り「自分の心でさえままならないのに、他の人の気持ちを無理やりに転回させようとするのは、傲慢な行為」と述べ、自らの行為を省みている（佐野 2017: 12-3）。宗教者にとって、これまでひきこもりや精神障がいの当事者と話をする経験がないことや、自分の役割が不確かなまま参加するには不安や難しさが伴うようである。

プロテスタント系教会のS牧師の場合、佐野住職と診療所の高田さんから、宗教者の力を集めてやろうと声がかかった。そのとき、次のように思ったという。

けっこうなことだと思った。様似町（浦河町とえりも町の間）から東方面はメンタルヘルスで孤立していて挺入れが必要な場所。べてるを辞めて、えりもに拠点を置こうとしたとき、たまたま〈カフェデモンク〉の話があった。べてるや診療所に通えない人の拠点や高齢者の拠点があればいいと思っている。…自分の仕事を見直したい。えりもに行くことになったのはミッションだと思っている。これから自分の役割を考えなければならない。自分から選んだというのではなく、必要な時期に必要なとされることだと思う。〈カフェデモンク〉では、自分はまだ十分尽くせていないな、という気持ち。佐野さんからNPOを立ち上げるとき、協力をしてほしいと言われているが、まだ身動きできない。お客さん以上のものになれていない。えりも力を結集したい。今のえりもは、「何も無い、既得権もない」ので、シンプルになにかできそう。

S牧師は開催当時、〈べてるの家〉のスタッフとして勤務していた。したがって、S牧師にとっては、精神障がいの当事者への対応や当事者主体の活動に慣れていて。ところが、「これから自分の役割を考えなければならない。（中略）まだ身動きできない。お客さん以上のものになれていない」というように、〈カフェデモンクえりも〉では宗教者としての役割が見いだせていないようである。

ひるがえって、〈カフェデモンクえりも〉という場が、宗教者にとって「自分の役割を見いだせない場所である」という認識は、当事者にとって

重要な意味をもつ。一般的には〈カフェデモンク〉での宗教者の役割は、参加者の悩みを傾聴することとされている。それに対して、〈カフェデモンクえりも〉では宗教者の明確な役割はなく、宗教者であっても参加の仕方は自由である。自己紹介で宗教者自身が自分の抱える苦悩を吐露していたように、苦悩を語る人とそれを傾聴する人という役割関係が固定されず、それぞれが悩みを抱える当事者になり得ている。言い換えれば、ここでは宗教者と当事者は対等な関係にあり、これは「サードプレイス」の特徴の一つ「参加者はレヴェラー（水平派）である」（オルデンバーグ 2013：69-73）ことに合致している。この事実が、当事者にとって「宗教者も悩みを抱える人」として認識され、〈カフェデモンクえりも〉という場所は「だれもが悩みを抱えている」という意味では対等の場であり、そのことが当事者に安心感を与える場となっているのである。

5.2 「プログラムのないところがおもしろい」——スタッフと当事者たち

参加者にとって〈カフェデモンクえりも〉に関する印象はなにか。その答えから導かれるものは「プログラムのないところがおもしろい」ということである。〈カフェデモンクえりも〉が8ヶ月過ぎた頃、さまざまな立場の参加者にどんな印象かを聞いてみた。それぞれ別の場所で時を変えてインタビューしたが、声をそろえて「行かないと何をするかわからないところがおもしろい」というのである。

〈べてるの家〉のソーシャルワーカーのPさんは「驚いたのは、クリスマス会でお坊さんが牧師さんに『お祈りをしてください』といったこと。それがおもしろかった。次は、プログラムがないこと。毎回、自然発生的で、行かないと何をするかわからないということが魅力的。凧作りや写経などあったけど、一人ひとりやりたいことを作り上げていくところがいい」という。Pさんによれば、日頃かかわっている近隣地域の精神障がい当事者会では年間スケジュール、月ごとのプログラムが決まっているので、新鮮味が薄れているという。また、メンバーとスタッフの役割が固定的な関係であることから、〈カフェデモンクえりも〉の当事者主体のやり方はおもしろいという。

〈べてるの家〉の看護師のYさんもまた「これから熟成されていくところ、できあがっていないところがおもしろい。どんな人が来るのか楽しみだし、いろんな立場の人がいるのがおもしろい。牧師さんやお坊さん、ポ

ランティアの人がいるところ、それは浦河にはない。医療・福祉とは関係なくやっているのがおもしろい。何か自分から提案するというよりも、自分もその流れに委ねていたい。行かないとわからないところがおもしろい」という。

〈べてるの家〉の管理者兼ピアサポーターの佐々木さんは、おしゃべりが苦手である。〈カフェデモンクえりも〉でも自分から話しかけている様子はない。しかし、佐々木さんもまた「テーマもない、話さなくてもいい、決まり事もない場所、というのがいい。これが当事者にとって生活の糧となればいい。何が起こるかわからない、活気があるわけでもない、型にはまっていない、自由、気ままにふるまえるところがいい。ありのままの自分を出せるのがいい。ここは自分のスタイルを変えなくてもいい場所だ」と語っている。

さらに、〈べてるの家〉のスタッフ兼当事者であるIさんは、専門家が無意識に抱いてしまう専門家の「下心」について、次のように述べている。

デイケアのようなプログラムもない、〈べてるの家〉のような仕事もない。病院のように治療を目指していない、型にはまっていないというように、何もしないでいい場所。何の意図もなく純粋にしゃべっているのがいい。デイにつながるとか、外来につながるとか、そういう下心がないのがいい。今のように専門家や行政がくるなら、一回でいいかな。もし、自分が引きこもっていたとしたら、べてるのスタッフがいて、保健師が複数いて、診療所（スタッフ）の人がいて…、というんだったら一回で良いかな。町の人が普通に集まってみんなが交流するような地域のお茶の間の間的ならば、日常的にあってもいい。プログラムがない、というのがいい。ボランティアの人が居るけど、一緒におしゃべりすればいいのに。ボランティアさんのエプロンはなくてもいい。ボランティアの人ももてなす側ともてなされる側という関係だけではなく、一緒に楽しめばいい。

こうした声から浮かび上がってくるのは、行政や市民レベルでの活動に潜む主催者側の「何かやらなければならない」という「思い込み」である。たとえ民間主体の活動であっても、医療・福祉の専門家や行政がかかわる活動の多くは、効果を期待して、目的や対象者、プログラムを明確化

しがちである。浦河町の保健師によれば、行政が居場所づくりを企画しても、参加者は集まらないという。行政が企画する場合、明確な目的が必要であり、数か月もしくは1年間というような期限付きであり、対象者を特定することが求められるからである。それに対して〈カフェデモンクえりも〉では、目的はあいまいで不確定であり、予測不能なことが起こり得る。参加者がいる限り、継続することが前提である。飛び入りの参加や参加者の出入りも自由である。これは、「サードプレイス」の魅力の一つ「たいてい無計画で、予定外で、組織のまとまりがなく、型にはまらない」（オルデンバーグ 2013：83）という指摘に一致している。こうして、〈カフェデモンクえりも〉は専門家や宗教者にとって「思い込み（常識）」を覆す場所となっている。

6. 「居場所」を創り続けること

長期にわたってひきこもっている若者にとって、「居場所」をどこに求めるのだろうか。寝食の場が家庭だとしても、そこが「居場所」になるとは限らない。家族との対話がない、または家族との対話だけが世界のすべてである若者にとって、社会への扉を開く機会はほとんどない。したがって、何らかの事情で家庭に閉じこもらざるを得ない若者にとって、社会との接点になる場をあえて創出しなければ、社会への扉は閉じたままである。

筆者は、えりも町立中学校・高校の協力を得て、2017年度にえりも町の中学・高校生の生活実態についてのアンケート調査を実施した。その結果、えりも町では中・高生にとって家庭や学校以外で「居場所」となる社会的な空間はほとんど存在しないという実態⁷⁾が浮かび上がった（浮ヶ谷 2018）。そのことから、〈カフェデモンクえりも〉という場は、ひきこもりや精神障がい当事者が社会への扉を開いていくきっかけとなるだけでなく、一般の若者にとっても「居場所」となり得る可能性が見えてきたのである。

では、人々が集う「居場所」とはどのような場所なのだろうか。〈カフェデモンクえりも〉の活動から見えてきたのは、「行ってみなければわからない」という不確実性と、その場で活動内容が決まる即興性は、常に居場所を刷新する力があるということである。目的志向の予定調和的な場であるよりも、先が読めない場はワクワク感やドキドキ感を喚起し、参加への動機を生み出す要因となっていたのである。

また、宗教者や医療・福祉の専門家という一般社会での役割をほとんど問わない場であることが重要であった。他の〈カフェデモンク〉が当たり前とする、傾聴する側（宗教者）と苦悩の語り手（参加者）という一方の役割関係は求められず、参加者の固定化しない関係性は〈カフェデモンクえりも〉の特性である。他方、専門家の構えが問われる場でもある。精神医療の領域で専門家が持ち込みがちな「管理」「監視」のまなざしを、どこまで差し控えることができるか（「脱施設化」）が問われ続ける場所でもある。

〈カフェデモンクえりも〉は、はじめからカタチがあるわけではない。専門家と当事者、当事者と当事者、地域住民（ボランティアを含む）と当事者、専門家と行政担当者という、参加する人たちがそれぞれが織りなす関係の網の目（「関係態」）として存在するだけである。当事者主体の活動は、当事者にとって「そのままがいい」という存在への肯定感と安心感を生み出し、将来を見据える機会を与えてくれる契機ともなっている（レルフの「場所性」）。〈カフェデモンクえりも〉という場は、オルデンバーグの言葉を借りれば、家庭や職場、学校における役割や関係が持ち込まれず、だれにとっても「とびきり居心地よい場所」（サードプレイス）として創られ続けている。子どもや若者から高齢者までが集う場であり、暮らしの場と直結していることが肝要なのである。

おわりに代えて——地域ケアの創出に向けて

〈カフェデモンクえりも〉は、①社会的に孤立しがちな人々の出逢い、触れ合いの場を提供し、共に生きる地域を目指す、②医療、保健、福祉、教育の充実を図るために、立場の違う人々が集い、学ぶことが出来る機会を作る、③世代を超えた住民交流を通して、共に寄り添いながら助け合いの心を育てる、という3つの目的を掲げ、ひきこもりの当事者や家族はもちろんのこと、地域住民にとっても触れ合いの場となることを目指している（〈カフェデモンクえりも〉運営委員会 2017）。

②で意図するのは、医療・福祉・教育・宗教の専門家はその専門性を取り払った参加の場とすることである。これまでの病院医療であれば、専門科別の治療方針をもち専門的医療を提供してきたが、暮らしの場を基軸にするということは人の全体的生を対象とすることである。地域住民を主体とする活動は人々の暮らしと密着しており、住民主体を実現するためには

専門家の「脱施設化」という構えが常に問われることを意味している。その上で「多世代共生」という時間軸で捉える世代間交流の視点を掲げている。

これらの目的を具体化しようと、診療所は現在認知症高齢者のための小規模多機能ホームの開設に向けて取り組んでいる。診療所は〈カフェデモンクえりも〉を主催者とし、在宅での看取りを視野に入れた「住み慣れた場所でいつまでも」勉強会、住民参加型の地域デザインミーティング、医療・福祉の専門家と宗教者によるシンポジウムを開催してきた。高齢者に限らず子どもや若者まで多世代を視野に入れた交流の場を構想し、さらにはひきこもりや精神障がい当事者の就労の場を想定し取り組んでいる。

これらの活動を通して、地域密着型のケアを創出する際に宗派、宗教を超えた宗教活動が社会資源として一定の役割があることを示すことができた。地域の歴史とともに歩んでいる寺院は、医療・福祉の専門家よりも地域住民からの信頼が厚い。地元住民から信頼を得ている寺院であれば、その活用は地域ケアの創出という観点から再考されるべきである。また、全国に180,000ヶ所以上にもよる宗教法人（寺社・教会等）が存在する日本社会において（文化庁編 2015）、宗教者自身がより自覚的に地域社会での役割を再考するならば、宗教との連携による地域ケアの創出は大いに期待できるに違いない。

〈カフェデモンクえりも〉の活動が一定の成果を示したことで、今後、若者のための「居場所」づくりや高齢者の病老死を支えるために宗教施設や宗教者がかかわるスタイルは、医療資源の乏しい過疎地における社会資源として一つのモデルを示すことができるだろう。都市部においても宗教者が多職種連携チームの一員として参加する可能性を提示できるのではないだろうか。

注

- 1) 中藤によれば、「居場所」という言葉の原点は、日本社会では19世紀末頃に遡れるという。この時点では地理的な意味合いでしかなかったが、個人のアイデンティティや社会的なメタファにかかわるような今日的な意味合いが含まれるようになったのは20世紀中頃である（中藤 2017）。
- 2) オルデンバーグは、「サードプレイス」の例としてドイツのビアホール、イギリスのパブやフランスのカフェをあげている。その特徴として、①参加者

は社会的地位や身分、役割、経済状況とは無縁な関係を取り結び、だれでも出入り自由である、②交わされる会話は誰もが過不足なく話すことができ、全員が会話に参加できるなど、暗黙のルールがある、③アクセスしやすい場所である、④活動は無計画で、予定外で、組織としてのまとまりがなく、型にはまらない、⑤常連(なじみ客)の存在である、⑥地味さ、飾り気のなさであり、あって当たり前な生活の一部にすぎない、⑦元気を取り戻す場所であり、ぬくもりがあり、気楽な場所である、ということを描いている(オルデンバーグ 2013: 64-97)。本稿では、「サードプレイス」の特徴を参考にし、〈カフェデモンクえりも〉の「場所性」について検討していく。

- 3) 浦河ひがし町診療所の設立の経緯については、(浮ヶ谷 2017a) に詳しい。
- 4) 〈浦河べてるの家〉とは、ケアと就労と当事者研究によって構成される社会福祉法人化された精神障がい当事者コミュニティのことである。基軸となる活動は、1970年代浦河日赤精神科を退院した当事者とソーシャルワーカーの向谷地生良氏によって始められ、とりわけ当事者研究は国内のみならず海外にも周知されている。
- 5) 滋賀県東近江市永源寺地区の永源寺診療所所長の花戸貴司医師は、従来の地域包括ケアシステムを住民主体として編成し、「地域まるごとケア」を掲げ、そこでは宗教者も含めている(花戸 2015)。
- 6) 東日本大震災直後、仙台市の葛岡斎場では、身元不明の遺体や遺骨を供養するために、宗教者たちがボランティア活動として読経や祈りを行ったが、政教分離原則に則り、仙台市当局との取り決めから4月末には撤退することになった。おそらく市営の施設での宗教活動は相いれないから宗教者は退去するようという申し入れであると思われる。しかし、被災者にとって供養や傾聴活動は必要であることから、行政とは分離したカタチで供養や傾聴活動を継続することになる。その一つとして〈カフェデモンク〉(お坊さんの移動傾聴喫茶)が始まったのである(谷山 2015)。
- 7) 中学・高校の在学時もしくは卒業後に、ひきこもり状態になる若者が多いことから、えりも町の中高生を対象に生活実態に関するアンケート調査を試みた。その結果、中高生の日常生活はほとんど学校、部活、家庭、地域産業(コンブ漁)の手伝いで構成されていることがわかった。過疎地域であることと少子化という社会背景を受けて、同学年や他の地域との交流がほとんどないという実態が明らかになった(浮ヶ谷 2018)。

付 記

本稿は、2016年度科学研究費助成事業基盤研究(C)「精神医療と宗教の連携による『地域ケア』の創出についての人類学的研究」(課題番号:16K03239)の成果の一部である。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、〈カフェデモンクえりも〉に参加しているNさん、Tさん、Hさんから、それぞれのエピソードを論文に掲載する許可をいただき、心から感謝の意を表します。また、Nさん、Tさん、Hさんを支援している診療所のスタッフの方々、本研究への理解と協力に謝意を表します。

文 献

- 藤竹 暁編, 2000, 『現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ3 現代人の居場所』至文堂.
- 萩原建次郎, 2018, 『居場所——生の回復と充溢のトポス』春風社.
- 花戸貴司, 2015, 『ご飯が食べられなくなったらどうしますか?』農文協.
- 子どもの参画情報センター編, 2004, 『子ども・若者参画シリーズI 居場所づくりと社会つながり』萌文社.
- 中藤信哉, 2017, 『心理臨床と「居場所」』創元社.
- オルデンバーグ, レイ (=忠平美幸訳), 2013, 『サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房.
- レルフ, エドワード (=高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳), 2004, 『場所の現象学——没場所性を越えて』ちくま学芸文庫.
- 高田大志, 2018, 「スタッフの脱施設化」伊藤順一郎監修, 小林 繁・佐藤さやか編, 『病棟に頼らない地域精神医療論』金剛出版.
- 高橋紘士編, 2012, 『地域包括ケアシステム』オーム社.
- 田中治彦編著, 2001, 『子ども・若者の居場所の構想——「教育」から「関わり」の場へ』学陽書房.
- 谷山洋三, 2015, 「震災と慰霊」似田貝香門・吉原直樹編『震災と市民2 支援とケア』東京大学出版会.
- 浮ヶ谷幸代, 2009, 『ケアと共同性の人類学——北海道浦河赤十字病院精神科から地域へ』生活書院.
- , 2015a, 『「暮らしの場」を再構築するケア——東日本大震災の被災者

の苦悩に寄り添う〈カフェデモンク〉の活動から』『相模女子大学紀要』VOL.79: 25-39.

- , 2015b, 「『耕されている場』でピアであり続けること」浮ヶ谷幸代編『苦悩とケアの人類学』世界思想社.
- , 2017a, 「日本の精神医療における『病院収容化（施設化）』と『地域で暮らすこと（脱施設化）』——北海道浦河病院精神科病棟の減床化と廃止の取り組みを中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第205集: 53-80.
- , 2017b, 「精神医療と宗教との連携による『地域ケア』の創出」『地域ケアリング』Vol.19: 62-7.
- , 2018, 『えりも町中学生・高校生の生活実態に関するアンケート調査報告書』, 相模女子大学特定研究助成費（A）「現代日本における多世代共生のための『地域ケア』の創出に関する人類学的研究——北海道えりも町の中高生の自尊意識と生活実態の調査を中心に」（浮ヶ谷幸代代表, 2017.4—2018.3）.

資 料

文化庁編, 2015, 『宗教年鑑 平成26年度版』文化庁.

〈カフェデモンクえりも〉運営委員会, 2017, 〈カフェデモンクえりも〉規約資料.

佐野俊也, 2017, (冊子)「四諦八正道について正しい道を歩む」転法舎.

東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座, 2017, 「東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター」第11号.

実践宗教学寄附講座運営委員会「臨床宗教師倫理綱領」<http://www2.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/diarypro/data/upfile/66-2.pdf> 2017/0724access.